大江宏設計 神武天皇聖蹟顕彰碑の設計過程

文部省技手時代の大江宏の設計活動に関する研究 その1

THE DESIGN PROCESS OF THE JINMU EMPEROR'S HONORING MONUMENT BY HIROSHI OHE

A study on the design activities of Hiroshi Ohe in the Ministry of Education: Part 1

石井 翔大^{*1}

Shota ISHII

This study aims to elucidate Hiroshi Ohe's activities in the Ministry of Education and to consider the architectural view of Ohe before World War 2. Hiroshi Ohe (1913–1989) worked as a technician at the Ministry of Education from 1938 to the beginning of 1941 and was involved in the construction of the Jinmu Emperor's honoring monument and the National History Museum. This study collected and analyzed primary materials such as sketches, drawings, and documents created by Ohe during the Ministry of Education's Technical Time, which have been stored in the Ohe Architect's Atelier (formerly Hiroshi OHE, Architect and Associates).

Keywords: Hiroshi Ohe, Jinmu emperor's honoring monument, Design process, Drawing collection

大江宏, 神武天皇聖蹟顕彰碑, 設計過程, 図面資料

1. はじめに

建築家・大江宏 (1913–1989) は、東京帝国大学工学部建築学科を卒業した 1938 年から 1941 年初頭まで、文部省宗教局保存課に技手として勤務し、紀元二千六百年奉祝記念事業の「神武天皇聖蹟の調査保存顕彰」と「国史館の建設」に携わった。しかし、大江が具体的にどのような役割を担ったかについては、大江自身の述懐からその一端が窺い知れるのみであった。また大江が関わった国史館は、当初設計競技が予定されており、その意匠をめぐる議論が日本工作文化連盟を中心として展開されるなど注目をあびた計画であったが、時局の影響により競技自体が実施に至らず、詳細は不明であった。大江建築アトリエ (旧大江宏建築事務所) には、大江が文部省技手時代に作成したスケッチや図面、書類などの一次資料が複数保存されており、未発表であった国史館の設計競技規程案も含まれている。本研究は、これらの資料を新たに蒐集整理、分析することで、大江の文部省技手時代における活動の実態を明らかとし、戦前大江の建築観の考察を行なうとともに、日本近代建築史において重要な位置にある国史館計画の詳細の一端を明らかとすることを目的とする。

本研究で蒐集した一次資料は、神武天皇聖蹟顕彰碑に関する大江自筆スケッチや図面 37 点、国史館に関する大江自筆スケッチ 105 点、大江が所持・作成した文部省関連の書類 50 点である^{注1)}。本研究はこれらを整理し、通し番号^{注2)}を付した上で分析を行なった。本稿はその第一稿として、「神武天皇聖蹟の調査保存顕彰」における大江の設計活動を検証する。

本稿の構成として、2 章では文献資料をもとに、紀元二千六百年奉祝記念事業の概要を述べる。3 章では、新たに蒐集した一次資料と文

献資料を併用し、大江が当時具体的にどのような業務に携わっていたのかを明らかとする。4 章では、大江自筆による神武天皇聖蹟顕彰碑のスケッチと図面を分析し、その設計過程を 4 段階に分類した上で、当時の大江の建築観を考察する。最後に 5 章をもって結とする。

2. 紀元二千六百年奉祝記念事業の概要

紀元二千六百年奉祝記念事業は、神武天皇即位紀元二千六百年 (西暦 1940 年、昭和 15 年) を記念し催された一連の祝典に併せ、当時の政府が計画した 6 事業を指す。すなわち、1. 「橿原神宮境域並畝傍山東北陵参道の拡張整備」、2. 「神武天皇聖蹟の調査保存顕彰」、3. 「御陵参拝道路の改良」、4. 「日本万国博覧会の開催」、5. 「国史館の建設」、6. 「日本文化大観の編纂出版」である^{注3)}。当時文部省に在籍した大江が携わったのは、上記のうち 2. 「神武天皇聖蹟の調査保存顕彰」と 5. 「国史館の建設」の事業であった。

まず文献資料を元に、記念事業の計画が実施されるまでの経緯を概観したい。皇紀二千六百年にあたる 1940 年に向けて、アジア初となる万国博覧会とオリンピック開催の機運がそれぞれ高まるなか、1935 年 10 月 1 日、内閣に「紀元二千六百年祝典準備委員会」 (以下、準備委) が設置された。準備委は官制によらない、いわば首相の私的諮問機関であった^{注4)}。準備委による三回の総会を経て協議が進められたのち、1936 年 7 月 1 日、官制の公布による正式の行政機関として、「紀元二千六百年祝典事務局」 (以下、祝典事務局) と「紀元二千六百年祝典評議委員会」 (以下、評議委) が設置、準備委は廃止された。新たに設置された機関のうち後者、評議委は、祝典及び各種奉祝記念事業に関する重要事項の調査審議をすることを目的としており、構成委員には準備委員会の大部分が続投、逐一増員もなさ

^{*1} 法政大学大学院デザイン工学研究科 博士後期課程・修士 (工学)

Grad. Student, Graduate School of Eng. and Design, Hosei Univ., M.Eng.

れた。建築分野に関わる評議委員としては、伊東忠太(1867-1954)、大熊喜邦(1877-1952)、佐野利器(1880-1956)らが、増員人事にて任命されている^{注5)}。

1936年11月9日、評議委は第二回総会を開催、紀元二千六百年奉祝記念事業として先述の6事業の実施を決議し、同報告を政府に答申した^{注6)}。その後、記念事業の遂行を担うべく、官民一体の「財団法人紀元二千六百年奉祝会」(以下、奉祝会)が1937年7月7日に設立、同会の申請により、5.「国史館の建設」は1938年3月28日に^{注7)}、また2.「神武天皇聖蹟の調査保存顕彰」は同年6月17日に^{注8)}、それぞれ文部省への委嘱が内閣総理大臣より認可された。以降、両事業は文部省主導により、実現へ向け遂行されてゆく。

3. 文部省における大江宏の経歴

3-1. 大学卒業から文部省就職まで

「国史館の建設」の文部省委嘱と時を同じくして、1938年3月、大江宏は東京帝国大学工学部建築学科を卒業した。大江はその後大学院へと進学、同級生の浜口隆一(1916-1995)とともに岸田日出刀(1899-1966)の研究室に在籍していた^{注9)}。同年7月、文部省は国史館造営計画の為、宗教局保存課の臨時増員をおこなっている^{注10)}。大江はこの人事に併せて大学院を退学、同課に技手として就職したものと考えられる^{注11)}。なお、文部省への就職は大江自身の意思ではなく、教室からの指令に従った結果であった^{注12)}。大江はこの指令を、父・大江新太郎と交流があり、かつ奉祝会の調査委員でもあった大熊喜邦や佐野利器らの手配によるものと推察している^{注13)}。

3-2. 神武天皇聖蹟の調査及び顕彰碑の設計

文部省は上記の臨時増員以降、1939年3月9日に「国史館造営委員会」を設置するまでの約8ヶ月間、国史館に関する動きは見せていない。大江はその間、国史館関係の業務から一旦離れ、神武天皇の聖蹟調査に参加していたと考えられる。

「神武天皇聖蹟の調査保存顕彰」の事業内容は、まず文献調査と実地調査により聖蹟の場所を定めたのち、各地に顕彰施設を建設するというものであった^{注14)}。調査の流れを概観しておく。まず1938年6月より文部省職員による文献調査が開始、同年11月より翌1939年3月まで、同じく文部省職員による実地での予備調査が行なわれた^{注15)}。聖蹟候補地がある程度絞られたのち、1939年4月から翌1940年5月まで、文部省職員の調査班(調査主任と2~4名の職員で構成)による実地調査、また有識者らで構成された「神武天皇聖蹟調査委員会」による実地調査が、並行して行なわれた^{注16)}。結果、1940年7月までに計19箇所の聖蹟顕彰地が選定された^{注17)}。

大江は、上記の文部省職員による文献調査から途中参加したと考えられる。後年、大江は以下のように述べている。

ぼくが就職したところは文部省だったから、もっぱら『風土記』や『続日本紀』や『古語拾遺』などを讀んだりして、本郷で近代建築を学習して得たものが一体われわれの建築の風土に対してどんな意味を持っているのか葛藤しましたね。文部省では半年に一度ずつレポートを出せばいいという大変に恵まれた環境にあったけれど、トータルに建築というものを自分で作り得るような状態にはなかった。^{注18)}

文部省職員による文献調査は、主に日本書紀と古事記を資料としながら、その他の古文獻・研究論考・地方史料等も含め実施された。

大江は上記のうち、その他の古文獻を中心に、調査を命じられたと考えられる。文献調査に続き、大江は実地調査にも同行した。大江は後年、以下のように述懐している。

元来国史博物館の造営が担当ではあったのですがだんだん資料が苦しくなり始める頃だったので、なかなかそれが實際化しないために、内閣の2600年記念事業の方を手伝わされました。それは神武天皇の聖蹟を調査して、そこに記念碑を建てて歩く仕事でした。それをいいことにして出張費で神武天皇の歩いた所をずっとくまなく歩いたことが非常に楽しかったですね(笑)。文部省というのはこんな楽しいところか(笑)。全部官費で(笑)、東征の順に歩くのですから、こんな楽しいことはないわけです。そんなことで文部省にはいるようなことになりましたのは、たいへん幸いだったと思います。^{注19)}

神武東征の足跡を辿る旅行は、大江にとって非常に楽しいものであった^{注20)}。大江建築アトリエには、大江の名が書かれた当時の復命書が3枚現存している(Fig.1)。3枚ともほぼ同内容であり、1939年4月付で文部大臣宛に提出された復命書の下書きと考えられる。内容は、「国史館建設ニ関スル用務ノタメ三月八日ヨリ二十二日ニ到ル十五日間愛知、三重、奈良、大阪、京都、兵庫、廣島ノ各府縣に出張」した事を報告するものである。文中の日程より、この復命書は、先述した文部省職員

Fig.1 report
復命書
(通し番号:MS-008、一部拡大)

員による実地での予備調査に関するものと考えられる^{注21)}。

聖蹟顕彰地の選定と並行して、顕彰施設の具体的内容に関する協議も進められてゆく。1940年2月13日、奉祝会は調査委員会を開き、顕彰碑の形状、材料、文書体その他、実施上の具体的方法について協議した。同様の協議を4月9日、同月20日と重ね、最後となる4回目の1940年6月1日の調査委員会にて、「顕彰碑ノ材料ハ最上等ノ花崗岩トシ、規模構造ハ尊嚴ナル聖蹟顕彰碑トシテ相應シク永久保存ニ堪ヘ得ルモノトシ、設計圖及少模型ニ依テ標準型ヲ決定」した^{注22)}。大江は、ここで言及される聖蹟顕彰碑の標準型を設計していた事が、大江建築アトリエ所蔵の資料より確認できる(4章で後述)。なお、紀元二千六百年奉祝記念事業の公式記録である参考文献3)上では、顕彰碑の設計担当者の名は記録されていない。

以降、各地の顕彰碑は順次、大江のデザインをもとに建設され、1941年11月29日、広島県の埃宮・多祁理宮顕彰碑前にて、全顕彰碑を包含した竣工式が挙行された^{注23)}。

3-3. 実現した顕彰碑の概要

実際に建設された神武天皇聖蹟顕彰碑の平面図と立面図をFig.2に、現在の顕彰碑の写真をFig.3に示す。顕彰碑は、碑石、台石、基壇、石柵の四要素で構成されている。顕彰碑の意匠は大きく分けて2種類存在している。本稿では図中左の意匠を「難波型」、右の意匠を「鵲色型」と呼称する。建設された顕彰碑19基のうち、「難波型」

Fig. 2 Honoring monuments elevation and plan
実現した顕彰碑2種の立面図・平面図

Fig. 3 Honoring monuments left:Naniwanomisaki, right:Tobimura
左：難波之碕顕彰碑 右：鶏邑顕彰碑

は2基、「鶏邑型」は17基である^{注24)}。両型の意匠は、碑石、台石の形態では一致している一方、石柵と基壇部分の意匠が異なっている。とくに「難波型」では石柵が省略されていることから、顕彰碑は「鶏邑型」が基本形であり、「難波型」はその簡易版であったと考えられる。各部材の主要寸法を確認しておく。まず碑石は、高さが十尺、正面幅は下端が三尺二寸、上端が三尺一寸、側面幅は下端が二尺八寸、上端が二尺七寸である。台石は、正面幅が十尺、側面幅が七尺二寸、高さが五寸五分である。「難波型」の基壇は、正面長さが葛石芯々二十一尺、側面長さが葛石芯々十五尺、高さ三尺二寸である。「鶏邑型」の基壇は、正面長さが隅束芯々二十一尺、側面長さが隅束芯々十五尺、高さ二尺五寸であり、石柵は高さ一尺八寸である。

4. 「神武天皇聖蹟顕彰碑」の設計過程

大江建築アトリエには顕彰碑関連の資料が全38点残されている。内訳は、大江自筆によるスケッチや図面37点、大熊喜邦・佐野利器・増田八郎・大江宏の連名による「神武天皇聖蹟顕彰施設設計書に関する調査報告」と題された書類1部(全18頁)^{注25)}である。これらのうち、連名の「調査報告」を除く資料37点を分析した結果、その設計過程は大きく四段階に分類可能であることが明らかとなった^{注26)}。以下では各段階の主要な資料を提示しながら、各段階の意匠の特徴や変更点を比較検討してゆく。また上記の四段階に該当しない意匠を示し、かつ大江の建築観が端的に表現されていると考えられる一枚の顕彰碑スケッチを取り上げ、その特徴を考察する。

4-1. 第一段階

第一段階のものと考えられるスケッチ5枚のうち主要な2枚をFig. 4、5に示す。Fig. 4は顕彰碑に関する資料37点のうち、大江自

Fig. 4 phase 1: sketch by Ohe
第一階段: 大江自筆スケッチ (通し番号: JK_1_001 表面)

Fig. 5 phase 1: sketch by Ohe
第一階段: 大江自筆スケッチ立面図 (通し番号: JK_1_004、一部拡大)

Fig. 6 phase 2: sketch by Ohe
第二階段: 大江自筆スケッチ立面図 (通し番号: JK_2_001、一部拡大)

筆の日付が確認できる唯一の資料である。二月一日(木)と紙面右上に書かれていることから、本資料は1940年2月1日(木)に作成されたものであり^{注27)}、前節で言及した1940年2月13日開催の調査委員会に向けて、描かれたスケッチであると考えられる。

スケッチに描かれた顕彰碑を実現案と比較し、意匠の差異を確認していく。まず碑石の大きさは、上述の日付の下に「一丈」と記されており、これは実現案の石碑の高さ十尺と一致することから、当初より同程度のスケールで設計が進められたことが分かる。一方碑石の形態は、スケッチ上では正面に矩形の突出部が描かれており、平坦な正面を持つ実現案とは異なる。また、碑石の底部から頂部にかけて緩やかなテーパが与えられた実現案に対し、本案は傾きのない直線的掃引体として描かれている。

台石と基壇は、ともに正方形の平面形態をもち(実現案は長方形)、基壇には3段の階段と両開き戸が設けられている。基壇の四周には白砂が敷かれ、白砂を庭が囲み、さらに庭の外周を区画する台形断

面の囲いが設えられている。また、この囲いを通過する際に二段の段差が設けられていることがFig.4より確認できる。

Fig.5をみると、基壇の幅は一边9mと記されており、これをFig.4左下の平面図に当てはめると、外周の囲いの大きさは約27m四方で計画されていたことが分かる。第一段階の顕彰碑は、実現案と碑石の大きさは同じである一方、より広範な敷地面積を想定した計画であったと考えられる。なお、石柵は各部材の寸法が実現案に比して細く想定されており、戦後の実作において細長のプロポーシオンを持つ柱を好んで用いた大江の趣向が、ここにも見出すことが可能であると思われる。

4-2. 第二段階

第二段階のものと考えられるスケッチ6枚のうち主要な1枚をFig.6に示す。碑石の形態は、頂部から底部にかけて大きく通増する意匠に変化しており、第一段階にあった正面の突出部分は失われ、より簡素な形態へ変化している。一方、碑石の下台石は二段となり、台石を構成する素材の色は二色が交互に用いられ、各段上面は段鼻のように突出する意匠に変更されるなど、装飾的な操作が加えられている。基壇は、高さが第一段階の半分程度に抑えられ、正面幅もやや短く変更されている。基壇を構成する素材は、ブロック状の部材が整然と組積されていた第一段階に比べ、第二弾階では台形状のやや不正形な石が一行に配列されている。石柵は各部材が太めのプロポーシオンとなり、実現案に近づいている。

第二段階以降のスケッチには、第一段階で見られた外周の囲いが描かれたものが存在しない。これは1940年2月13日の第一回調査委員会において、大江が提示したであろう外周の囲いが却下されたためと考えられる。第二段階で台石が二段の意匠に変化したのは、外周の囲いを却下されたことに対する一つの代案であったとも考えられる。

4-3. 第三段階

第三段階のものと考えられるスケッチ4枚のうち主要な1枚をFig.7に示す。第二段階と比較して、基壇と台石は二段から一段に戻り、また段鼻のような突出部は失われ、石柵は削除されるなど、いたる点で意匠が簡素になっている。これらの変更は、大江が第二段階の意匠を調査委員会で報告した際、より安価なものとするよう指示を受けてのものと考えられる。なお、同様の傾向は第四段階にも見受けられる。一方、新たに付加された意匠も存在している。第三段階を特徴づけるのは、碑石の正面、基壇もしくは台石に貫入するかたちで新たに置かれた石の存在である。第一・二段階で大江が考案してきた意匠が徐々に削がれてゆくなかで、顕彰碑の正面性を強調するために描いた最小限の操作であったと考えられる。

4-4. 第四段階

第四段階に至り、顕彰碑の形態はほぼ実現案と同様の姿となる。この時点で大江のラフスケッチはほぼなくなり、寸法を明確にした図面が描かれるようになる。Fig.8に、それら図面のうち主要な2枚を示す^{注28)}。第一段階以来、一貫して碑石正面に設けられていた三段の階段は、本図面でも設けられている。一方、最終確認用に作成されたと思われる外形上に切り抜かれた立面図(Fig.9,10)を見ると、階段も削除され、徹底した簡素化が行なわれた事が伺える^{注29)}。

4-5. 特異な一枚のスケッチ

上記の四段階に含まれない意匠を示し、かつ大江の建築観が端的

Fig. 7 phase 3: sketch by Ohe
第三段階：大江自筆スケッチ（通し番号：JK_3_001 裏面）

Fig. 8 phase 4: plan, elevation, section
第四段階：平立断面図（通し番号：JK_4_014、JK_4_015）

Fig. 9 phase 4: elevation
第四段階：外形に切り抜かれた立面図（通し番号：JK_4_018）

Fig. 10 phase 4: elevation
第四段階：外形に切り抜かれた立面図（通し番号：JK_4_020）

Fig. 11 sketch by Ohe
大江自筆スケッチ（通し番号：JK_0_001、一部拡大）

Fig. 12 sketch by Ohe
大江自筆スケッチ 装飾部分拡大（通し番号：JK_0_001）

Fig. 13 High point apartment No. 2, caryatid
ハイポイントアパートメント No. 2 車寄せのカリアティード

に表現されていると考えられる一枚の顕彰碑スケッチを Fig. 11 に、その拡大図を Fig. 12 に示す。碑石頂部には神社を想起させる切妻屋根が載り、石柱足元の四隅には挂甲を纏う古墳時代の兵士の埴輪を象った装飾が施されているなど、簡素簡明な意匠に収斂していった実現案とは異なり、複数の要素が積極的に包含されている。

大江は大学入学当初、デッサウのパウハウス校舎を始めとする無色透明の建築に強く惹かれていたが、大学二年の終りから三年の始め頃には既にそのような建築に対し「欲求不満を感じ始めていた」と述懐している^{注30)}。一方、近代建築に対する認識が徐々に変化し始めた当時の大江が関心を抱いたのが、パーソルド・リュベトキン（1901-1990）主宰の建築事務所テクトンによる、ハイポイントアパートメント No. 2（1938）であった^{注31)、注32)}。同作は車寄せの廂を支える柱として、エレクトイオンのカリアティードを引用しており、装飾を拒絶し純粋性を主張する既往の近代建築の範疇を逸脱していた（Fig. 13）^{注33)}。Fig. 11 は、リュベトキンの試みに感化された大江が、日本の伝統に即し実践に移したスケッチであったと考えられる。

5. 結語

第一段階から第四段階に至る神武天皇聖蹟顕彰碑の設計過程は、当初描かれた大江の構想が、時局の影響により徐々に縮小されていく過程であったといえる。第一段階における大江のスケッチの主題は、外から内へと徐々に領域を収斂させていく平面計画や、2段階のレベル差（外周の囲いを通る箇所を2段、基壇から碑石に達する箇所を3段の階段）によるシークエンスの創出により、顕彰碑を包含する空間を重量化させる事であったと考えられる。この点において、建築を体験する人々の心理的变化を重要視した後年の大江の志向^{注34)}が、顕彰碑の設計に、既に看取されることが指摘できる。

大江は後年、「混在併存」の原理を標榜して近代建築への批判を展開し^{注35)}、屋根と装飾の重要性を説いて自身の作品にも多用した^{注36)}、^{注37)}。顕彰碑の資料群から見出された Fig. 11 のスケッチは、屋根と装飾が主題とされており、近代建築の特徴の一つである簡素簡明性からの逸脱が図られていることが見受けられる点で、のちの大江の建築を予告する重要な資料であると考えられる。

以上、本稿では神武天皇聖蹟顕彰碑に関する大江の設計活動の詳細を明らかとした。次稿では、国史館に関する大江の設計活動を、蒐集した一次資料を元に検証する。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、資料の閲覧に際し、大江建築アトリエ代表・法政大学名誉教授の大江新先生に、ご厚意を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) The record of commemorative ceremony for the 2,600th anniversary of the founding of Japan Vol.1, Yumani Shobo, 1999. 5
紀元二千六百年祝典記録 第1巻 第一冊（上）、ゆまに書房、1999. 5
- 2) The record of commemorative ceremony for the 2,600th anniversary of the founding of Japan Vol.2, Yumani Shobo, 1999. 5
紀元二千六百年祝典記録 第2巻 第一冊（下）、ゆまに書房、1999. 5
- 3) The record of commemorative ceremony for the 2,600th anniversary of the founding of Japan Vol.15, Yumani Shobo, 2002. 11
紀元二千六百年祝典記録 第15巻 第八冊（上）、ゆまに書房、2002. 11
- 4) The record of commemorative ceremony for the 2,600th anniversary of the founding of Japan Vol.16, Yumani Shobo, 2002. 11
紀元二千六百年祝典記録 第16巻 第八冊（下）、ゆまに書房、2002. 11
- 5) Ohe Hiroshi Nihon gendai kenchikuka series⑧, Shinkenchikusha, 1984. 6
別冊新建築 日本現代建築家シリーズ⑧ 大江宏、新建築社、1984. 6

注

- 注1) これらの資料は全て、「国史館」、「神武天皇聖蹟顕彰碑」と大江が手書きしたB4サイズ程の茶封筒に収められ、大江の書斎に保管されていた。
- 注2) 各資料は以下の要領で通し番号を付した。神武天皇聖蹟顕彰碑：「JK-YYY」、国史館：「KK-X-YYY」、文部省書類：「MS-YYY」。なお、Xは期（1. 第一期、2. 第二期、3. 第三期、4. 第四期、0. その他）、YYYは同カテゴリ内での通し番号。
- 注3) 紀元二千六百年祝典記録 別巻、ゆまに書房、pp. 183-184, 2002. 11
- 注4) 古川隆久：皇紀・万博・オリンピック皇室ブランドと経済発展、中央公論社、p. 101, 1998. 3
- 注5) 参考文献1), pp. 77-78
- 注6) 参考文献2), p. 148
- 注7) 参考文献4), pp. 27, 36
- 注8) 参考文献3), p. 18
- 注9) 浜口隆一：戦時の評論活動、建築雑誌1985年1月号、日本建築学会、p. 27, 1985. 1
- 注10) 参考文献4), pp. 38-39
- 注11) 参考文献4), pp. 42-45に、国史館に携わった人物の名簿が掲載されている。

る。大江は文部技手として、同名簿に記載されている。なお、神武天皇聖蹟調査に関する名簿(参考文献 3), pp. 57-61)に大江は含まれていない。

注 12)「大学に4月にはいって、2ヶ月目の6月におやじが亡くなったのですが、私のおやじの同期の先生方には工大の前田松韻先生ですとか、横河事務所の中村伝治先生とか、そのひとつ上のクラスに大熊喜邦先生とか、佐野利器先生とか佐藤功一先生とかがいっちゃって、私が大学で1年ですし、第2人がまだ専門学校とか、中学校であったものですから、その先生方から大江の息子だったらこういう道を進むべきであるというようなことから、特に私が自発的に希望した形ではなく、他動的に文部省にはいる結果となったわけです。」大江宏、森田慶一、村野藤吾、谷口吉郎、浦辺鎮太郎、山口廣、平井聖、長谷川堯：近代建築の歩みを聞く、建築雑誌 1977 年 4 月号、日本建築学会、p. 13, 1977. 4

注 13)「ぼくの場合はね、教室というよりはとも佐野（利器）先生とか大熊（喜邦）先生から遠隔操作があったように思うんです。おやじのようなことを、というような意思が佐野先生や大熊先生にあったんじゃないかと思うんです。それで文部省に入りました。というのは、ちょうど 2600 年記念事業で歴史博物館をつくる計画があったので、それを担当するようということだったんですね。」参考文献 5), pp. 188-189

注 14) 参考文献 3), pp. 61-69

注 15) 同上、p. 71

注 16) 同上、pp. 72-76

注 17) 菟狭（大分県）、崗水門（福岡県）、埃宮・多祁理宮（広島県）、高嶋宮（岡山県）、難波之碕（大阪府）、盾津（大阪府）、孔舎衛坂（大阪府）、雄水門（大阪府）、男水門（和歌山県）、名草邑（和歌山県）、狭野（和歌山県）、熊野神邑（和歌山県）、菟田穿邑（奈良県）、菟田高倉山（奈良県）、丹生川上（奈良県）、鷗邑（奈良県）、磐余邑（奈良県）、鳥見山中霊時（奈良県）、狭井河之上（奈良県）の計 19ヶ所。参考文献 3), p. 147. なお、各地に建設された顕彰碑は全て現存している。

注 18) 大江宏×武者英二：併存混合としての日本建築と現代建築、建築雑誌 1981 年 2 月号、日本建築学会、p. 29, 1981. 2

注 19) 前掲注 9) 、p. 13

注 20) 大江から文部省時代の話を聞いたと思われる川添登 (1926-2015) は、当時の大江を窺い知ることの出来る証言を残している。「卒業の秋、文部省宗教局保存課に勤務することとなった。仕事といっても、地方の美術館の調査をし、半年に一本のレポートを提出するだけであつたから、呑気なものだった。朝遅く出勤するとすぐに昼休みになり、昼食をとり近所の食堂に出掛けてゆき、帰ると、歴史や哲学出身の同僚たちが彼の部屋に集まってきて、ひけどきまで議論をするのであつた。彼の部屋は、比較的広いのに、彼ともう一人だけでゆっくりしていたからである。この時期が、大江のこれまでの生涯でもっとも良い時代であつたと彼は述懐している。そのうち、あんまりひまだというので神武天皇の聖蹟に記念碑を建てる、という仕事をおおせつかった。（中略）まず日向国宮崎県をおとずれ、福岡を経由し、中国地方を通り、浪華から、紀伊水道を船で東行して、熊野へ上陸して、吉野、そして大和盆地へとはいった。つまり、神武天皇の征東といわれる伝説上の経路を、そのままだった訳である。熊野から吉野へはいる道は、当時はほとんどひらけておらず、バスも通っていなかった。その深い山々を通って大和盆地へ出たときの感慨は、いまも忘れることができないという。」川添登：建築家・人と作品下、井上新書、pp. 11-12, 1968. 6

注 21) 聖蹟調査のものと考えられる復命書に「國史館建設ニ関スル用務ノタメ」とあるのは、単に書類上の都合であると考えられる。前述の通り、大江は国史館担当として採用されており、聖蹟調査には正式な人員として含まれていない。復命書で大江と連名になっている増田八郎も同様である。

注 22) 参考文献 3), p. 145

注 23) 参考文献 3), pp. 365-366

注 24) 各顕彰碑の意匠と寸法、建設過程の詳細は、参考文献 3), pp. 150-358 に掲載されている。

注 25) 「神武天皇聖蹟顕彰施設設計書に関する調査報告」の内容は、盾津、孔舎衛坂、難波之碕、雄水門、男水門、菟田高倉山、丹生川上の 7ヶ所の聖蹟地について、顕彰碑を置くべき場所や方向の調査結果を報告するものである。文末には、総括として、「以上各處を調査したる結果總てに通じて基壇には石段を設けざるを良しと認む。」とある。以降で確認するように、大江のスケッチ上では第四段階の途中まで基壇に石段が設けられていることが確認できる為、この報告書は、顕彰碑の形態がほぼ決定したのちの最終調整の段階で作成されたものと考えられる。

注 26) 各段階ごとに通し番号を振った資料の内訳を Table. 1 に、また本稿で取り上げた資料の一覧を Table2 に示す。

注 27) 他に可能性が考えられる作成年は 1939 年と 1941 年だが、前者の 2 月 1 日は水曜日、また後者の 2 月 1 日は土曜日である為、作成年は 1940 年であると確定できる。

注 28) JK_4_015 図中右下には「大江朝臣増田八郎」と記されているため、先述の復命書 (Fig. 1) で大江とともに聖蹟調査を担当したことが見受けられる増田もまた、聖蹟碑の設計に関わったと思われる。しかし、現存するスケッチ群は明らかに大江の筆致であるため、増田が顕彰碑の設計にどの程度貢献したかは不明である。

注 29) 階段の削除については前掲注 25) を参照。

注 30) 大江宏×宮内嘉久：ある青春—建築の風景一九三〇年代、『風声 京洛便り』第八号、風生同人、p. 28, 1979. 11

注 31) 同上

注 32) ハイポイントアパートメント No. 2 は、1938 年 9 月から 1939 年 1 月にかけて、『Architectural Review』をはじめ海外の雑誌 4 誌に発表された。よって大江が同作の情報を得たのは大学卒業後であり、早くとも文部省就職前後の頃であつたと考えられる。各掲載誌の詳細は以下を参照。John Allan: Berthold Lubetkin - architecture and the tradition of progress, Artifice, p. 643, 2012

注 33) なお、リュベトキン自身は、積極的にこのような試みを行ったわけではなく、住民の要望に答えたものであつた。前掲注 32) p. 298 には、カリアティード採用に至るまでの 4 段階の図が掲載されており、当初は無柱の片持ち廂で考えられていた事がわかる。

注 34) 大江宏：建築の本質、建築文化 1962 年 9 月号、彰国社、pp. 37-40, 1962. 9

注 35) 詳細は筆者の前稿を参照のこと。石井翔太、種田元晴、安藤直見：大江宏設計「法政大学市ヶ谷キャンパス計画」の設計過程 建築家・大江宏の建築観の変遷に関する研究 その 1、日本建築学会計画系論文集 738 号、pp. 2131-2141, 2017. 8

注 36) 「私があるものをつくる時いちばん大切にしているのは実にその「間」であって、間取りこそ建築の真髄なのです。好んで屋根を架けることのひとつの理由は、屋根ほどの確に間取りを象徴しているものが他にないからです。」大江宏：別冊新建築 日本現代建築家シリーズ⑧ 大江宏、新建築社、p. 17, 1984. 6

注 37) 「かつて様式的表現とその装飾的ディテールは、一般社会と建築の専門領域との間を取り結ぶ最も普遍的な絆として、はるか以前から存在した。つまり建築様式や建築装飾は、一般の人びとと建築家の間に通じ合う共通の言葉として、たいへん重要な情報上の役割を果たしてきたのである。」大江宏：様式と装飾、建築文化 1974 年 11 月号、彰国社、p. 80, 1974. 11

Table1 The breakdown of the documents
神武天皇聖蹟顕彰碑に関する大江自筆資料内訳

phase	段階	serial number	通し番号
	1	JK-1-001 ~ 005	
	2	JK-2-001 ~ 006	
	3	JK-3-001 ~ 004	
	4	JK-4-001 ~ 021	
other	その他	JK-0-001	

Table2 The list of the drawings 本稿で取り上げた資料一覧

phase	serial number	Fig No.	material	technique	size
段階	通し番号	図番号	材質	技法	寸法 (縦横, mm)
1	JK_1_001	Fig.4	grid paper 方眼紙裏使い	pencil 鉛筆	225 × 287
	JK_1_004	Fig.5	grid paper 方眼紙	pencil, ink 鉛筆、インク	224 × 287
2	JK_2_001	Fig.6	grid paper 方眼紙	pencil 鉛筆	224 × 287
3	JK_3_001	Fig.7	drawing paper 画用紙	pen (セビア色)	212 × 283
4	JK_4_014	Fig.8 left	tracing paper トレペ	ink インク	791 × 539
	JK_4_015	Fig.8 right	tracing paper トレペ	ink インク	790 × 537
	JK_4_018	Fig.9	drawing paper 画用紙	pencil 鉛筆	215 × 340
	JK_4_020	Fig.10	drawing paper 画用紙	pencil 鉛筆	202 × 337
other その他	JK_0_001	Fig.11, 12	drawing paper 画用紙	pencil 鉛筆	282 × 212
	MS-008	Fig.1	manuscript paper 原稿用紙	ink, brush 墨、筆	259 × 363

図版出典

Fig. 1, 4-12 大江建築アトリエ所蔵

Fig. 2 参考文献 3) pp. 154-155, 176-177 (図中の文字、線は筆者記入)

Fig. 3 筆者撮影

Fig. 13 前掲注 13), p. 297

THE DESIGN PROCESS OF THE JINMU EMPEROR'S HONORING MONUMENT BY HIROSHI OHE

A study on the design activities of Hiroshi Ohe in the Ministry of Education: Part 1

Shota ISHII^{*1}

^{*1} Grad. Student, Graduate School of Eng. and Design, Hosei Univ., M.Eng.

This study aims to elucidate Hiroshi Ohe's activities in the Ministry of Education and to consider the architectural view of Ohe before the world war II .

Hiroshi Ohe (1913–1989) worked as a technician at the Ministry of Education from 1938 to the beginning of 1941 and was involved in the construction of the Jinmu Emperor's honoring monument and the National History Museum. This study collected and analyzed primary materials such as sketches, drawings, and documents created by Ohe during the Ministry of Education's Technical Time, which have been stored in the Ohe Architecture Atelier (formerly Ohe Hiroshi Architects). The design process of Jinmu Emperor's honoring monument from the first stage to the fourth stage can be considered a process of a gradual reduction in the conceptions of Ohe.

It is assumed that the theme of Ohe's sketches in the first stage was to superpose the space containing the monument by creating a plan and sequence in order to gradually join the area on the outside to that on the inside. Therefore, it can be pointed out that Ohe's intention in the later years, which emphasizes the psychological changes in people who experience building, has already been taken into account in the design of the monument.

In the later years, Ohe developed criticism against modernist architecture, advocating the principle of “interminglement and coexistence” and arguing about the importance of roofing and decoration.

It is assumed that the sketch of Fig.11 contains the themes of roofing and decoration, deviating from simplicity that is one of the features of modernism architecture. Therefore, this sketch is considered an important material foretelling the construction of Ohe during the later years.

(2017 年 12 月 10 日原稿受理, 2018 年 2 月 13 日採用決定)